

『古今和歌集』の序文から見る小野小町像とその歌風

富岡 紗子
教科領域コース

1. はじめに

『古今和歌集』仮名序及び真名序では小野小町について以下のように評している。真名序については書き下し文を示す。本文及び現代語訳は『新編日本古典文学全集』に拠る。

小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。

〈小野小町の歌は、昔の衣通姫の系統であります。しみじみと身にしみる歌ですが、強さを持っていません。いふなれば、病に悩んだ高貴の女性に似ております。強くないのは女の歌だからでありましょう。〉
(『古今和歌集』仮名序 p. 27)

小野小町の歌は、古の衣通姫の流なれども、然も、艶にして気力なし。病婦の花粉を着けたるが如し。

〈小野小町の歌は昔の衣通姫の末流であるが、色っぽいかわりに、なよやかで気力に欠けている。病んだ淑女がちょっとお化粧をしたふうである。〉
(『古今和歌集』真名序 p. 427)

仮名序の執筆者紀貫之は、小野小町の和歌を「あはれなるやうにてつよからず」と評価しており、「つよからぬは女の歌なればなるべし」と評している。真名序の執筆者とされる紀淑望は小野小町の和歌を「艶にして気力なし」と評している。仮名序と真名序は対応している。つまり小野小町の和歌はあはれで艶である一方つよからず気力なしだと述べられている。さらに両序で小野小町は「衣通姫の流」を受け継いでいると言われている。「衣通姫」は記紀に登場する美女である。呼び名の由来は色香が衣を通して輝き出している様子からである。和歌に優れていたと言いつたされており和歌三神の一人でもある。しかしながら今日に残る衣通姫の歌はわずか二首であり、どのような側面で小野小町が「衣通姫の流」であるかは明瞭でない。本研究では他の歌人との比較分析を通して小野小町の和歌が「あはれなるやうにて、つよからず」、「艶にして気力なし」と呼ばれる所以を明らかにする。

2. 『古今和歌集』序文の解釈

『古今和歌集』の序文における小野小町の評価文の解釈は以下のようなものである。「あはれなるやうにてつよからず」は「同情できるほどに共感的ではあるが、精神的に不安定」、「艶にして気力なし」は「二つの要素の結びつきによって深まる美しさがあり、歌人（小町）の弱々しさや頼りなさが感

じ取れる」と解釈した。また、「つよからず」や「気力なし」という言葉で精神的な弱さが言われている。これは小野小町が女性であることによってそのように評されている。

3. 恋歌における小町の姿勢

『古今和歌集』に採録されている小野小町の和歌を検証する。『古今和歌集』に採録されている小野小町の和歌は17首ある。その17首のうち13首が恋歌である。「あはれなるようにてつよからず」や「艶にして気力なし」という小野小町の評価は恋歌を念頭に置いたものなのではないだろうか。小野小町の和歌における精神的な弱さを恋歌に当てはめて考えてみる。それは小野小町の和歌が「つよからず」で「気力なし」なのは恋に消極的な様子や待ちの姿勢がそう示される訳なのではないだろうか。『古今和歌集』に採録されている小野小町の恋歌で、夢に関連するものがいくつかある。この中で、思い人が夢に現れることを詠ったものは552番歌と553番歌である。同じく『古今和歌集』に採録されている和歌の中で同じ状況を詠ったものと比較すると、小野小町の和歌に見られる精神的な弱さは明確である。その精神的な弱さは、恋愛において消極的な様子や待ちの姿勢、柔らかい表現によって生れている。以下の用例における本文及び現代語訳は『新編日本古典文学全集』に拠る。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

〈あの人のことを何度も恋しく思いながら寝たので、あの人が夢に現れたのだろうか。もし、それが夢と知っていたならば、私は目は覚まसानかっただろうに。〉(恋二 552 p. 221)

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

〈うたた寝の夢に、恋しいあの人をふと見てしまっからというものは、はかない夢というものでも頼みに思いはじめるようになってしまった。〉(恋二 553 p. 221)

君をのみ思ひ寝に寝し夢なればわが心から見つるなりけり

〈あなたに逢えた夢は、あなたのことだけをひたすら思っ寝たゆえに見た夢なのだから、私の熱意によって見た夢だったのですよ。〉(恋二 608 p. 239)

同じく夢に思い人が現れる状況を詠んでいる。特に552番歌と内容が重なるが、552番歌は自分の思いの強さをそこまで主張することなく、むしろ夢が覚めてしまったことに着目した和歌である。また、「せば・・・まし」の反実仮想からは、現実にならなかつた希望に思いを寄せる様子は恋への積極性や精神的強さは感じられない。一方608番歌では自分の思いの強さを前面に出してできている和歌であり、一般に女性的ではないとされる気の強さが感じられる。608番歌は弱気な様子が見られず同情してしまうような部分も少ないが、552番歌の叶わない希望を詠うその消極的な様子は同情する詠み手も多いだろう。

恋ひわびてうち寝るなかに行きかよふ夢の直路はうつつならなむ

〈恋に悩み苦しんでちょっとまどろんだ夢の中で、あの人の所と行き来することができた。夢ではまっすぐ近道で通じていた道よ、現実であってほしい。〉(恋二 558 p. 223)

558番歌は553番歌と特に内容が重なる。553番歌は夢のはかなさや、はかない夢にさえ頼みに

している気持ちを詠っており、余裕の無さや恋に控えめな様子を感じる和歌である。一方 558 番歌では希望や願望を歌にしており、精神的な弱さはなく、むしろ恋に積極的な様子が感じられる。

窪田（1958）は「夢の歌に現れてゐる小町は、純情な、消極的な様子を思はせるが、これは恋ひしてゐる人に對しての心情で、それでない場合には、理智的な、むしろ辛辣な面ももつてゐた人だつたのである。安倍清行の懸想歌に對する返歌はその適例で、これほどではなくても、これに類した歌も他に見える。これを要するに、歌人としての小野小町は、純情の人であり、鋭敏な感受性と共に理智性もある人で、情熱をもつて一気に歌を詠み得る人であつた。表現技法も、根本には素朴性をとらへて、繊細に、線細く、自由な表現に堪へ得る人だつたのである。」と述べている。小野小町の恋への姿勢は控えめで純情という言葉が合うだろう。こうした姿が詠み手に「あはれ」に映り、「つよからず」、や「氣力なし」という評価に繋がつたのであろう。ここでは 552、553 番歌を例に挙げたが、それ以外の和歌からも気持ちの弱さや繊細さは伺える。「あはれなるようにてつよからず」と「艶にして氣力なし」の解釈を「同情できるほどに共感的ではあるが、精神的に不安定」、「艶にして氣力なし」は「二つの要素の結びつきによって深まる美しさがあり、歌人（小町）の弱々しさや頼りなさが感じ取れる」とした。これは、控えめで消極的な小野小町の恋愛スタイルが精神的な不安定さや頼りなさに繋がっており、詠み手の同情心がくすぐられるのである。

4. 二つの要素の組み合わせによる美しさ

次に「艶」である姿について検証する。和歌が「艶」である姿を「二つの要素の組み合わせによって深まる美しさ」と解釈したが、目立った本歌取りや典拠のある和歌、新感覚の語の組み合わせなどは見られない。一方で小野小町の和歌には比較的掛詞や比喻で一つの語に複数の意味を持たせる和歌が多く『古今和歌集』の他の六歌仙の和歌と比較したところ、掛詞や比喻で意味を複数もたせる技法を用いているのは小野小町の和歌に、特に多く見られる。さらに窪田（1958）は 938 番歌について次のように述べている。「「身をうき草の」の「うき」は「憂き」に「浮き」を掛けたものであるが、これは単に一語を掛詞にしたといふ程度のものではなく、一首の作意となつてゐるものである。又、「浮草」は自信の心境の比喻ではあるが、その感味から言ふと、比喻を越えて、自身その物となつてゐるものである。すなはち自然現象と自身とを一体としてゐると言ひ得るものである。」ここから、自然と重ね合わせることで和歌からにじみ出る小町自身の美しさが表れるのではないか。掛詞や比喻で一つの語に意味を複数持たせる小野小町の手法では自然と自身を重ね合わせることで深みを増しており、その姿を「艶」と評価していたのではないだろうか。他の和歌を見ても、自分自身や思い人と自然現象を重ね合わせることで情趣深さを際立てている作品が目立つ。例えば、822 番歌では「秋」と「飽き」を掛ける手法を用いている。和歌の内容としても、秋風で稲の実が駄目になってしまうように思い人から飽きられることのむなしさを嘆いている。782 番歌では秋の時雨に降られる木の葉の様子と自身を重ね合わせ、盛りが過ぎ心変わりされてしまったことを嘆いている。623 番歌では相手を意中の人として「見る目」がない自分の様子と「海布目」が生えていないことを重ね合わせることで辛辣に思いを述べている。このように自然現象と自身を重ね合わせることで和歌の味わいを深めている様子は明瞭であり、この点で小野小町の和歌は「艶」なのである。

5. おわりに

仮名序の執筆者紀貫之は、小野小町の和歌を「あはれなるやうにてつよからず」と評価しており、「つよからぬは女の歌なればなるべし」と評している。真名序の執筆者とされる紀淑望は小野小町の和歌を「艶にして気力なし」と評している。そして「あはれなるやうにてつよからず」は「同情できるほどに共感的ではあるが、精神的に不安定」、「艶にして気力なし」は「二つの要素の結びつきによって深まる美しさがあり、歌人（小町）の弱々しさや頼りなさが感じ取れる」と解釈した。小野小町の和歌、特に恋の歌からは恋愛において待ちの姿勢や消極的な様子が目立ち、気の強さが見られないという点で「つよからず」、また「気力なし」の姿が印象に残る作風であった。また、そういった恋愛における控えめな姿勢が詠み手の同情心や共感力をくすぐるものとなっている点は「あはれ」であった。さらに、小野小町の和歌が「艶」であるのは、掛詞や比喻を効果的に用い、自然現象と自身のはかなさや憂いを重ね合わせることで切なさを孕んだ美しさを際立たせているためである。その点からも「気力なし」の姿を読み取ることができる。

衣通姫の歌謡とも比較検討したが、上述した解釈を基にすると小野小町と衣通姫が同じ流れ、系統とは言いがたい。仮名序に挙げられている「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」は、控えめな様子や精神的な弱さは感じられず小野小町の恋愛のスタイルに近いとは言いがたい。また、目立った掛詞や比喻などの手法も見られず、小野小町が衣通姫の流れであると言われる訳は明らかではない。

小野小町の恋歌は彼女の恋愛の姿勢が色濃く表れている。和歌における彼女の様子は非常に心許なく不安定さを孕んでいる。さらに効果的に修辞を用い、自然現象と自分の姿を重ね合わせることで、より詠み手に情趣を感じさせるものとなっている。こういった点で小野小町の和歌は「あはれなるやうにてつよからず」、「艶にして気力なし」であると言える。

参考・引用文献

浅見和彦（1997）『新編日本古典文学全集 51 十訓抄』小学館

阿部秋生（1994）『新編日本古典文学全集 20 源氏物語』小学館

小沢正夫、松田成穂（1994）『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』小学館

片桐洋一、福井貞助、高橋正治、清水好子（1994）

『新編日本古典文学全集 12 竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語』小学館

窪田空穂（1958）『和泉式部集・小野小町集』

久保田淳、山口明穂（1998）『新日本古典文学大系 38 六百番歌合』岩波書店

菅野禮行、徳田武『新編日本古典文学全集 86 日本漢詩集』小学館

田中祐（1969）『中世文学論研究』塙書房

中野幸一（1999）『新編日本古典文学全集 14 うつほ物語』小学館

福留温子（1984）「俊成における「艶」の性格-歌合判詞をめぐって-」『学習院大学国語国文学会誌』
27 pp. 22-38